

國松淳和（編）

不明熱・不明炎症レジデントマニュアル

萩野 昇

帝京大ちば総合医療センター第三内科学講座講師（血液・リウマチ）

COVID-19の波が世界を押し流している。まさしく「パンデミック」の風景であるが、このパンデミックは各社会が内包する脆弱性を片端から明らかにしつつある。わが国の診療現場においても、少なからぬ数の「システムエラー」が明白になったが、その一つに「日常診療において『発熱患者』に対してどのようにワークアップすればよいのか、きちんと理解して診療している医師は決して多くない」という不都合な事実がある。卒前の医学教育において、疾患ごと・臓器ごとの縦割りの教育（そのメリットが幾分かは存在することは、旧世代の医学教育を受けた者としては、一応留保をつけておきたいところではあるが）を受け、卒後の臨床現場では多くはon-the-job trainingの形で、教える側の医師の専門性に大きく偏った教育が施される現状であれば、今後もしばらくは慣性的に現状が維持されるのではないかと悲観せざるを得ない。

そのような状況で出版された『不明熱・不明炎症レジデントマニュアル』は、「遷延する発熱＝不明熱」ならびに「不明炎症」という、非常にありふれていながらぞんざいな扱いを受けてきた症候に対して、多くの分野の専門家が寄稿する形でまと

められた1冊であり、まさにwith COVID-19の一著としてふさわしい内容である。編集者の國松淳和先生はすでに類似テーマで『外来で診る不明熱—Dr. Kの発熱カレンダーでよくわかる不明熱のミカタ』（中山書店、2017）、『これって自己炎症性疾患？』と思ったら一疑い、捉え、実践する』（金芳堂、2018）などのスマッシュヒットを飛ばしておられるが、今回のレジデントマニュアルは過去の単著よりもやや基本的なレベルに読者対象を絞っており、「レジデント」が踏まえておくべき内容として適切と思われる。一方で、「コアな國松ファン」にとっては、やや食い足りない感じも否めないが、そういう読者に向けては國松節全開の10章「とにかく全然わからないとき」、付章「こっそり読みたい『不明熱マニュアル外伝』」が準備されている。ただし、付章については「コアな國松ファン」は立ち入り禁止の札が立っているの、そういう意味でも「こっそり読みたい」。

章立てとして「検査（4章）」「疾患（5、7、9章）」「症候（6、8章）」と分けられているのも素晴らしい。疾患・症候がわざわざ2群に分けられていることから、最初からまれな事象を考えるべきではなく、同時

にまれな事象を見落としてはならないという編者のニッチな切り口がうかがえる。言い換えると、5章から9章に至るまでの流れには「病名がなくてもできること」があるだろうという編者の思想をバックグラウンドとして見てとることができる。

「コアな國松ファン」であると同時に「不明熱・不明炎症屋」の端くれとして、自分ならどう書くだろう、と考えたとき、「状況による分類」をもう少し前面に打ち出すのではないかと、思った。つまり、本書では「渡航関連感染症」のみ「状況」が明記されているが、それ以外にも「高齢者・超高齢者」や「透析患者」「担がん患者」という切り口があっても良い。第2版以降に期待したい。

総括すると、本書はレジデントマニュアルシリーズの他の本と同様、1回軽く通読して「脳内にOSをインストール」し、折に触れて（不明熱・不明炎症の患者を診療する度に）該当部分を読んで使い倒していくべき本である。お手元に置かれることを強くお勧めしたい。

●B6変型/頁498/2020年04月
定価：本体4,500円＋税
[ISBN978-4-260-04201-7]
医学書院 刊